



その⑩—— アラバマ州ハンツビル

南部の星：綿花畑の中で急成長を遂げる「ロケットシティ」

米国南部にあるアラバマ州の中堅都市ハンツビルは全米で最も経済成長が目覚ましい地域として、ここ数年の間に名声を高めてきた。今日においても米国屈指の綿花生産地であることから南部の典型的な農作地帯と思われがちだが、実は人類の月面着陸を実現させたアポロ計画のロケット製造拠点を持ち、それが土台となって今では軍事宇宙産業のメッカとなっているという事実は米国人ですら知る人は少ない。しかし、この隠れたハイテク都市はトヨタをはじめとする海外企業が次々に投資を行った結果ハイテク製造業の中核拠点として、今まさに世界中に知れ渡ろうとしている。

小林知代 = 文
ワシントン・コア 代表取締役

人権運動発祥の地

日本の読者にはあまりなじみがないであろうアラバマ州は、東に隣接するジョージア州や北のテネシー州の間に挟まれ、南部地域の中でも地味な存在であることは否めない。あえてアラバマ州で有名な事象を3つ挙げるならば、第1に全米50州中アルファベット順で最初の州であるということだ。米国では小学校3年生になると50州の名前を全部覚える必要があり、そのための歌もある。「アラバマ、アラスカ、アリゾナ……」で始まり、「……ウェストバージニア、ウィスコンシン、ワイオミング」

で終わるこの歌のおかげで、米国の子供たちにとって最初に出てくるアラバマは、現在住んでいる(もしくは生まれた)州以外に最初に覚える州名となる。

第2にヘレンケラーの生まれた州であり、第3は州都モントゴメリーが、1960年代の人権運動の引き金になった事件の発祥地であることである。「平等だが分離せよ：Equal but separate、黒人・白人を分離はするが教育・交通機関などの利用は平等とする」と主張する人が多かった時代に、黒人差別に抗議するため、市内バスの白人用の座席に座り続けた黒人女性ローザ・パーク氏が逮捕された事件は、そ

の後、社会を揺るがす大問題へと発展していく。「Deep South」(奥深い南部)と呼ばれる地域では、多くの人が人種差別問題に長く悩まされてきた。アラバマ州もその例外ではない。

アポロ計画のロケット製造拠点

しかし、同州北部に位置するハンツビルは、歴史、産業、住民構成など、他の南部の都市とはかなり状況が異なっている。ハンツビルの町並みが一望できる小高い丘に登ると、最も高い建物は、他のバイブルベルト(聖書地帯)に見られるような教会の尖塔ではなく、



「サターンV」のロケットのモデルである。「サターンV」とは、人類月面着陸を実現したアポロ計画に使われたNASA（米航空宇宙局）の開発した大型ロケットだ。第2次世界大戦末期、米国政府の奨励でドイツ人のフォン・ブラウン氏が150人の科学者・エンジニアを引き連れてロケット設計・製造プロジェクトをハンツビルで展開した。その後、これは国防総省のミサイル製造プロジェクトに発展し、この地に軍事宇宙産業が根を下ろすことになる。

現在でも、ハンツビルにはハイテク

森と湖に囲まれたすばらしい環境の中で、宇宙・軍事関連の企業が最先端研究開発を行っている。

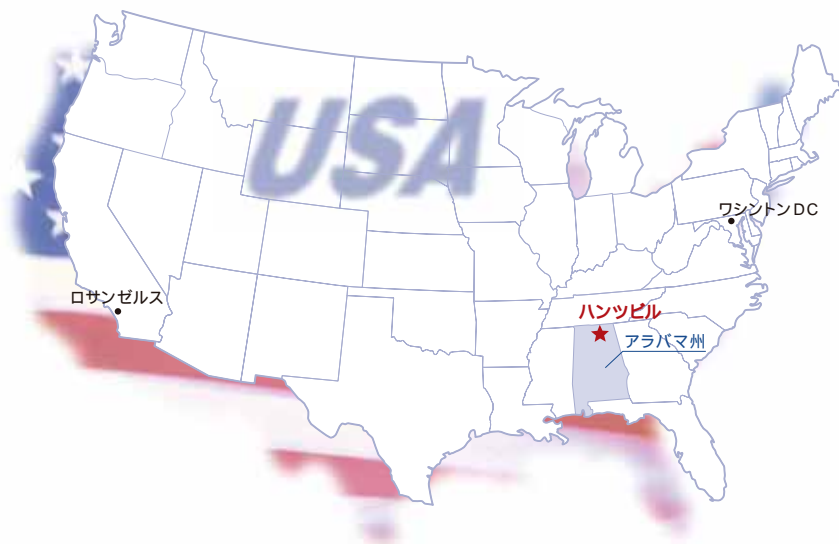
に強い人材が多く、7人に1人がエンジニアであるという。このように、ハンツビルの経済は、NASAや国防総省に依存する形で発展を遂げてきた。しかし、アポロ計画が終わり、冷戦も終焉。最近では米国内の基地閉鎖や統合が進

んでいるため、ハンツビルは連邦政府に依存した地域経済を多様化させる必要に迫られていた。

トヨタのトラック・エンジン工場

企業誘致を手がける自治体にとって、ぜひ地元に進出してもらい、工場を設置してほしいと願う企業があるとすれば、それはトヨタ自動車であろう。トヨタは、米国自動車のビック3（GM、フォード、ダイムラークライスラー）の利益を合わせた額を1社で稼ぎ出す超優良企業である。ハンツビルは2000年、競合する都市を抑えて、トヨタ自動車の誘致に成功した。北米におけるトヨタ初のエンジン工場の拠点となったハンツビルは、全米の自治体から羨望のまなざしを受ける。

このハンツビル工場では、トヨタのピ





ハンツビルは日本とのつながりも深い。日本から贈呈された桜並木に囲まれた橋は、その友情を象徴している。

ックアップ・トラック「ツンドラ」用のエンジンが製造されている。ピックアップ・トラックは、数年前まで米国の若者たちの間で人気だったSUV(スポーツ・ユティリティ車)に代わる、今一番ホットな車種である。後ろに荷台があるこのトラックは、現在では4ドアのタイプが主流であり、乗り心地もセダン並みとなっている。この予想を凌ぐ「ツンドラ」の人気で、ハンツビルのエンジン工場は朝夕の操業シフトをフル回転しているほか、2003年の操業開始以来、既に数度にわたる工場の拡張も行われ、年間40万個のエンジンを製造し、800人以上の雇用を生んでいる。

ロケット製造の地でエンジンを製造

エンジン工場としてハンツビルに白羽の矢が立ったのは、言うまでもなく魅力的な経済的インセンティブがあったからだ。税制優遇措置はもちろんのこと、工場用地価格の大幅なディスカウント、工場周辺と工場敷地内の道路整備、従業員研修を無償で提供するな

ど、金額にして総計300億円ほどのインセンティブがトヨタへ提供された。しかし、この程度のインセンティブならば他の都市でも用意できた。決定打となったのは、人類を月に送ったロケットが当地で作られたという過去の実績と、その伝統を引き継ぐエンジニアを中核とした人的資源に他ならない。こればかりはほかの都市では到底まねすることはできなかった。

「20世紀において人類最高の功績の1つに数えられるアポロ計画のロケットを作った土壌があれば、最高のトラック用エンジンも作ることができるだろう」とトヨタ首脳陣を納得させたという。戦後の宇宙・軍事プロジェクトを土台に、人的資源、ノウハウ、研究開発スキルを継続的に維持・向上してきたハンツビルの科学技術力が、トヨタ誘致成功の最大の理由の1つになった。

製造業が米国中西部から南部へシフト

アラバマ州に製造拠点を持つ外資系自動車メーカーは、トヨタが最初では

ない。既に、ドイツのメルセデス・ベンツのほか、ホンダが拠点を置いており、最近では、韓国の現代自動車が州都モントゴメリー付近に大型工場(従業員5,000人)を建設している。

このように、南部は中西部のデトロイトに代わる新たな自動車産業の集積地帯を形成しつつある。同様に、これまで中西部が中心であった製造業全体も、人件費・生活費が安く、組合の組織率が低く、人材のスキルや質が高い、といった理由から、中西部から南部へと拠点を移そうとしている。アラバマ州ハンツビルは、それを象徴するかのようになり、今では飛ぶ鳥を落とす勢いで経済成長を続けている。

ビジネスに最高の場所

ハンツビルの成功を如実に示しているものとして、米国の主要経済雑誌フォーブスが発表している「ビジネスをするのに最高の場所(Best Places in America to do business)」のランキング結果がある。ハンツビルは、2000年の164位から126位(2001年)、71位(2002年)、11位(2003年)と毎年ランクがアップしており、

1	ボイジー	アイダホ州
2	ラーレイ/ダーハム	ノースカロライナ州
3	オースチン	テキサス州
4	ワシントンD.C.	
5	アルバカーキ	ニューメキシコ州
6	ハンツビル	アラバマ州
7	ファイエットビル	アラバマ州
8	ノーフォーク	ヴァージニア州
9	アトランタ	ジョージア州
10	メディソン	ウィスコンシン州

ビジネスをするのに最高の場所
(Best Places in America to do business)
出展: Forbes 2005

2004年には8位、2005年は6位と、2年間連続でベストテン入りを果たした。ランキングの基準には、高等教育、ビジネスコスト、生活費などの10項目が設定されているが、その中でも他都市と比べてハンツビルが秀でているのが、エンジニアの数である。これは、地場産業のルーツが宇宙軍事産業によるところが大きい。

リサーチ施設と研修制度

世界トップクラスの研究開発センターである「カミング・リサーチパーク」がハンツビルにあることも、同地が科学・工学に強いことを示す証となっている。1960年代にミサイル開発など軍事宇宙産業のR&D施設として発足したりサーチパークは、今でこその他の地方自治体にも見られるが、ハンツビルのそれは産学官で構成された共同技術施設の草分け的存在である。ノースカロライナ州のリサーチ・トライアングルパークには敷地面積で若干劣るものの、入居企業数や企業の多様さでは世界トップ・レベルと言ってもよい。ボーイング、ロッキード・マーティン、AT&T、ゼロックス、ヒューレット・パッカードなどフォーチュン500クラスの有力企業のみならず、ベンチャー企業の入居するインキュベーター(ベンチャービジネスを軌道に乗せるまでの施設・機器・資金などの援助を行う場)や大学研究施設などが最先端技術開発を行っている。

また、アラバマ州の人材開発制度「AIDT: Alabama Industrial Deve

lopment and Training」も同地域の投資誘致活動に大きく貢献している。AIDTは、事業展開をする企業にとって真に役立つ実践的な研修制度であることが評価され、2004年には企業誘致専門雑誌「Expansion Management」で州運営研修制度のナンバーワンとして表彰された。実際、韓国の現代自動車がアラバマ州に拠点を持つことにしたのも、AIDTの存在が大きく貢献したと言われている。

ライバル都市を常に意識

ハンツビルの経済開発を振興するハンツビル商工会は、最近、「ハンツビル地域経済成長イニシアティブ」を立ち上げ、現在の成功に満足せず、さらなる発展を遂げるための施策を講じている。「今の成功にすがってはいけな。常に将来を見据えた計画を立てる必要があり、都市にとって現状維持は後退を意味する。前進あるのみだ」とは、海外誘致担当者のイーサン・ハドレー氏のコメントだ。特に、ハンツビル商工会は、他のライバル都市を意識

して、自らの経済開発の戦略を立案し実践している。ハドレー氏によると、一昔前までは、南部地域における中心都市の1つとしてハンツビルを位置づけ、州内や南部の地域内での有力都市と自分たちを比較していたという。しかし、今は単なる南部の中心地ではなく、「米国のハンツビル」を目指している。例えば、デルコンピュータや半導体工場などの集積で有名なテキサス州オースティンとの比較では、ハンツビルの「ハイテク・イメージ」はまだ高くないと認識している。

今後は、宇宙、軍事のみならず、エレクトロニクス、ソフトウェア、シミュレーションなどの最先端技術によってプレゼンスを高めていきたいと考えている。そして、将来的には米国内のみならず、「世界のハンツビル」を目指すという。トヨタ自動車に代表される世界の勝ち組企業を迎え入れることで、南部の一都市から、近い将来はグローバル・ハイテク製造拠地に躍進することを狙う。『ロケットシティ』の異名を持つハンツビルの将来は無限に広がっている。

eGov



小林知代

ワシントン・コア 代表取締役 www.wcore.com

津田塾大学国際関係学科を経て、米国バージニア州立大学にて修士学を取得後、ゼネラル・エレクトリック(GE)産業ロボット部門において日米合弁事業のコンサルタントを務める。1995年独立し、首都ワシントンの本拠地に日本企業・政府機関のグローバル化を支援する総合コンサルティング会社ワシントン・コア設立。代表取締役に就任。日経経済教室など、幅広く執筆、講演活動に従事。